山崎郷土研究会報

NO. 129
平成29.8.26
山崎郷土研究会
兵庫県宍粟市山崎町
大谷司郎

明治以降の山崎の年表（二）

大谷司郎

本年四月の当山崎郷土研究会の総会において、引き続き会長という重責を担うこととなり、力不足も顧みずお引き受けいたしました次第です。二年間お世話になりますがよろしくお願いいたします。

前号から、明治時代になってからの山崎を中心とした出来事を年表にするべく、貴重なページを使わせてもらっています。今回は紙面の都合上、明治十九年（一八八六）から同四十一年（一九〇八）までを紹介させていただきます。

この時期に小学校の制度の変遷がうかがえる記録が多くあり、年表の中で取り上げています。明治五年に「学制」が発布され、新時代に対応する人づくりのため、就学を督励しています。明治十九年四月には、「小学校令」が出され、義務教育の観念が明らかにされ、小学校四年が義務化されましたが、町内では就学率が六〇％を越えるのは明治三十年代に入ってからで、九〇％以上の子どもが通学するのは四十年代に入ってからとなります（『山崎町史』）。

目次

明治以降の山崎の年表（二）……大谷司郎 1
「崎門学派の系譜」と「福原謙七翁碑」のパネルについて……鎌田裕明 4
伊藤太郎平の事跡……伊藤一郎 6
安積氏とその城跡……竹内克司 8
山崎の城絵図について……清水哲 10
宍粟の銅鐸出土地の考察……片山昭悟 15
地区の話題
ふるさと戸原の地域づくり活動……釜井宣雄 18
城下小学校の時鐘・塩田の明證寺の梵鐘……20
金谷山部古墳・金谷一号墳……21
会員・家族の文芸……22
深川定義氏を悼む・研修旅行のお知らせ……23
事務局だより・編集後記……24
平成二十九年度・三十年度役員名簿……25

小学校令に基づき、町内の小学校では山崎の篠陽小学校のみに尋常科（四年）が、他の小学校には簡易科（三年）が設置されます。次いで二十四年には簡易科がすべて尋常科に変わりますが、郡内で篠陽小学校に「高等科」が設置されました。

三十年代になって、産業教育・実業教育の必要性から各地に実業学校が創設されはじめ、明治四十年、町内に「技芸専修女学校」が創設されました。同校が現山崎高等学校の前身となります。

明治以降の山崎の年表（3）

西暦年	和歴	年	月	日	事　項	出　典
1886	明治	19			山崎町鹿沢にあった山崎小林区署、兵庫大林区派出所になる。（山崎営林署の前身）	山崎郷土会報No.49
1887	明治	20			篠陽小学校に尋常と簡易の両科を併置する。	山崎郷土会報No.49
1888	明治	21	4	25	町村制が公布される。	山崎町史
1889	明治	22	1	13	「宍粟郡教育会」が有志で結成され、教育の必要性を説いた。（大正時代には管制的団体となった）	山崎町史
1889	明治	22	4	1	町村制なる。宍粟郡内1町18村発足する。山崎町、城下村、戸原村、安師村、富栖村、河東村、蔦沢村、神野村、神戸村、染河内村、下三方村、三方村、繁盛村、西谷村、奥谷村、千種村、三河村、土万村、菅野村(奥小屋含む)	山崎町史
1889	明治	22	4		大野親温が郡長になる。	兵庫縣宍粟郡誌
1889	明治	22			龍野治安裁判所山崎出張所が門前に設置される。	山崎歴史民俗資料館
1889	明治	22			町村合併に合わせて戸原地区内の各村にあった学校を一つにして、戸原尋常小学校となる。	山崎町史
1890	明治	23	2	21	上比地にあった知新簡易小学校が御名に移転する。翌年修業年限四年になり校名が知新尋常小学校(城下小学校の前身)となる。	山崎町史
1890	明治	23	5	17	自治体要素を削除した郡制が公布される.	山崎町史
1890	明治	23			明治17年以来、宍粟郡では全町村連合会を設け、教育、勧業、土木、衛生等の事務を漸次執行してきた。郡制施行以来、漸次郡の経営に移した。	兵庫縣宍粟郡誌
1890	明治	23			前年閉鎖した大成社を各町村連合で負担し合い、養蚕伝習所を開設し、蚕産の改良普及に努める。	山崎郷土会報No.49
1891	明治	24	4		小学校令改正で簡易科は尋常科となり、○○簡易小学校が○○尋常小学校となる。	山崎町史
1891	明治	24	5		篠陽小学校に高等科が設置され篠陽尋常高等小学校になる。	山崎町史
1891	明治	24			金融機関として、宍粟山崎銀行が設置される。	山崎郷土会報No.49
1892	明治	25	8		笠井彰が郡長になる。	兵庫縣宍粟郡誌
1892	明治	25	10	1	博文小学校と徳潤小学校が学区を整理され河東尋常小学校となる。	山崎町史
1893	明治	26			山崎勤倹銀行が設立される。	山崎郷土会報No.49
1893	明治	26			国歌「君が代」制定される。	山崎郷土会報No.49
1893	明治	26			東鹿沢元家老小野屋敷跡に天理教分教会が設置される。	山崎郷土会報No.49
1894	明治	27	1		山崎郵便局に電信業務が加わり、山崎郵便電信局と改称。	山崎町史
1894	明治	27			宍粟郡役所、本町から東鹿沢へ移転する。	兵庫縣宍粟郡誌
1894	明治	27	4		北海道開拓団篠津村に河瀬勇次郎、香山昇など重役陣が入地する。	新篠津村百年史
1894	明治	27	5		5月に12戸、11月までに27戸86人が宍粟郡から篠津原野に移住する。	新篠津村百年史
1894	明治	27	6		黒住教会荒神さん下に建つ。	山崎郷土会報No.49
1894	明治	27			篠陽小学校の校舎改築竣工する。	山崎郷土会報No.49
1894	明治	27			西の空に彗星が表れ変事の噂あり。	山崎郷土会報No.49
1894	明治	27	8	1	日清戦争起こる。	
1894	明治	27	12		武間謙が郡長になる。	山崎郷土会報No.49
1895	明治	28			岡本新が山崎町長になる。	山崎郷土会報No.49
1896	明治	29	8	9	山崎町公会堂で郡制施行後初議会開催される。（郡制実施により、県と市町の間に中間の自治体が位置づけられた。郡には課税権がなく、郡内各町村が郡費を負担した。）	山崎町史
1896	明治	29			公立の「勧業会」を設立。郡立農事試験場の設置。	山崎町史
1897	明治	30			巌石を穿ち洞門の隧道が開通(与位)	昭和27年神野村刊行本

明治以降の山崎の年表（4）

西暦年	和歴	年	月	日	事　項	出　典
1898	明治	31	7		最上山に石の玉垣できる。	山崎郷土会報No.50
1899	明治	32			郡に常設蚕業巡回教師を設置、改良飼育方法を授く。	山崎郷土会報No.50
1900	明治	33			町の有志のより、山崎町門前に宍粟製糸株式会社を設立する。	山崎町史
1900	明治	33			北魚町の恵美須神社に石の玉垣できる。	山崎郷土会報No.50
1900	明治	33			最上山下に郡の公会堂落成する。（鹿沢中門下の道場の古材を使用）	山崎郷土会報No.50
1900	明治	33			篠陽尋常小学校を山崎尋常小学校と改称。	山崎郷土会報No.50
1900	明治	33			山崎八幡神社が県社となる。	山崎町史
1900	明治	33	6		明治24年の沢山尋常小学校が土万第二尋常小学校に、葛万尋常小学校が土万第一尋常小学校に改称する。	山崎町史
1901	明治	34			生田省三が山崎町長になる。	山崎郷土会報No.50
1901	明治	34	7		農業の改良発達をめざし「宍粟郡農会」が結成される。	山崎町史
1901	明治	34			郡内に農事巡回教師招聘する。	山崎郷土会報No.50
1901	明治	34			郡有造林設置される。	山崎郷土会報No.50
1901	明治	34	12		旧藩主本多忠明侯山崎において逝去される。	山崎郷土会報No.50
1902	明治	35	5		神原清太郎が郡長になる。	兵庫縣宍粟郡誌
1902	明治	35			郡内造林計画活発となる。	山崎郷土会報No.50
1903	明治	36			妹尾新太郎が山崎町長になる。	山崎郷土会報No.50
1903	明治	36			山崎尋常小学校に修業年限四年の高等科を併置、山崎尋常高等小学校と改称する。	山崎郷土会報No.50
1903	明治	36			高等科の併設により、河東尋常高等小学校となる。	山崎町史
1903	明治	36			高等科の併設により、蔦沢第一尋常高等小学校（伊水小）、蔦沢第二尋常高等小学校（都多小）となる。	山崎町史
1903	明治	36			高等科の併設により、神野第二尋常高等小学校となる（33年からの神野第二尋常小学校）。	山崎町史
1903	明治	36	4		管制改革により山崎郵便局と旧に復した。	山崎町史
1903	明治	36	6		郡農会が畜産技手二人を招き施療と畜産を奨励した。	山崎町史
1904	明治	37			日露戦争始まる。予備後備の在郷軍人に召集令下る。	山崎郷土会報No.50
1905	明治	38			山崎町の8か町村でそれぞれに小学校が設置。	山崎町史
1905	明治	38			山崎町より出征海軍大将及び第十師団長へ慰問贈呈する。	山崎郷土会報No.50
1905	明治	38	3		河東村農事改良実行規約を定め農事改良を進めた。	山崎町史
1905	明治	38	8		市内各部落に青年団を組織する。	山崎郷土会報No.50
1906	明治	39			門前の製糸会社安志へ移転する。	山崎郷土会報No.50
1906	明治	39			山崎町日露戦争戦時記念誌の編纂をする。	山崎郷土会報No.50
1907	明治	40			山崎町立技芸専修女学校が創設	山崎町史
1907	明治	40			旧藩主子爵本多貞吉氏東京にて逝去、本家三男本多渉氏山崎本多家を相続する。	山崎郷土会報No.50
1908	明治	41	2		産牛馬組合を設置し、牛市場を開いた。	山崎町史
1908	明治	41	3		山下勢太郎が山崎町長になる。	山崎郷土会報No.50
1908	明治	41	4		高等科の併設により、戸原尋常高等小学校となる。	山崎町史
1908	明治	41	4		神野第二尋常高等小学校が山崎町五十波の神野第一尋常小学校と合併し、山崎町田井の西南に校舎を改築移転して、神野尋常高等小学校となる。	山崎町史
1908	明治	41			高等科設置により、菅野尋常高等小学校となる。	山崎町史
1908	明治	41			揖保川舟路改修意見書提出する。	山崎郷土会報No.50
1908	明治	41	12		電話交換事務の開始。	山崎郷土会報No.50

「崎門学派の系譜」と「福原謙七翁碑」のパネルについて

鎌田　裕明

山崎闇斎研究会では、平成二十九年度の事業として二枚のパネルを作成しました。イベントに際し神社を訪れる方への説明資料の一つとするとともに、併せて私たちの学びの深化充実を期すためのものです。

「崎門学派の系譜」（次ページ参照）は、本條衛前闇斎研究会会長が寸暇を惜しみ、多くの資料を渉猟され、数多の朱子学者の学説を分析・検討し、闇斎先生の系譜に連なる一八〇名をそれぞれ位置づけ、一覧にまとめられた労作で、闇斎学の権威であり中国哲学史専門の大分大学名誉教授牛尾弘孝先生の監修を得られて、この度の発表となりました。私は寡聞にしてこれだけ多数の学者を系譜ごとに整理した資料は初見です。改めて氏のご精励に畏敬の念を禁じ得ません。

「系譜」には、郷里山崎の碩儒福原謙七はじめ、林田の河野鉄兜、姫路の河合寸翁、竹原の頼山陽、そして暦学と囲碁の渋川春海（安井算哲）など、懐かしい名前が輝いています。研究会で学んでいる私たちには貴重な参考資料として活用できることが楽しみです。

「福原謙七翁碑」の福原謙七（天保十五《一八四一》～大正十三《一九二四》年）は山崎の米穀商の家に生まれました。若くして郷関を出、大坂の後藤松陰、篠山の渡辺弗措、柏原藩の小嶋省斎、備前の阪谷朗廬等の門に入り、志を天下に馳せる青年達と交わり、「修己治人」の儒学を深めました。苦節十余年、明治初年にはその学の深さが藩主本多忠鄰侯に達し、士籍に列せられて侍講を勤め、藩学を督する地位に補せられました。学制発布後は政府により飾磨県学区取締、次いで揖東郡長、印南郡長等に任じられるなど行政官として活躍しました。五四歳で官を辞して山崎に帰り、「請献学舎」を創設し地域の教育の振興に努めたり、保健の充実に寄与したと伝えられています。

この石碑は大正十二年、宍粟郡長と山崎町長を顧問として郡内に住む八十八名の敬慕者により建てられました。表面の題字は司法大臣、農商大臣を歴任した田健治郎が揮毫し、裏面は田艇吉（健治郎の兄）が福原謙七の友人として撰文しています。総高は自然石を積み重ねた台座を含め四・六メートル、山崎町内の石碑としては形、内容とも屈指です。

恵比須神社から最上山公園への道筋にある福原謙七翁

ふるさとの碩儒福原謙七については、会として以下のことを課題としていく予定です。①儒学を学ぶ者たちのネットワークの存在を阪谷朗廬、小島省斎、後藤松陰、田健治郎等との交流を辿って実証する。②福原謙七像を石碑建立発起人二十名等から聞きとる。③遺著『皇朝請献遺言』等を読み込む。

崎門学派系譜

- 山崎闇斎
  - 佐藤直方（福山）
    - 野田剛斎
      - 稲葉黙斎 — 奥平棲達庵 — 三上是庵 — 石井周庵
    - 跡部光海
      - 鈴木養察 — 鈴木養斎 — 伊庭静一
    - 稲葉迂斎
      - 村上玉水
        - 岡田寒泉
        - 服部栗斎
          - 頼　杏坪（竹原）
            - 大阪大学文学部内(財)懐徳堂記念会
            - 中井木菟麻呂
          - 宮原龍山
    - 伴部安崇
    - 三輪執斎（京都）
      - 河田琴卿
    - 豊田平七 — 細野幸助
      - 中井碩果 — 並河寒泉 — 中井桐園
      - 三宅春楼 — 中井竹山 — 中井履軒 — 山片蟠桃（高砂）
  - 浅見絅斎（近江）
    - 三宅石庵（京都）
      - 中井甃庵（龍野）
      - 富永仲基（大阪）
    - 三宅観瀾
      - 山口春水 — 山口履斎
    - 大月履斎
      - 沢田一斎
    - 味池修居
      - 犬飼訥斎
      - 松岡仲良
      - 古賀精里（佐賀）
        - 阪谷朗廬（備中） — 福原謙七（山崎）
        - 古賀侗庵 — 藤森弘庵（小野）
        - 斉藤拙堂 — 河原翠城（赤穂）
        - 篠崎小竹
          - 大国隆正
          - 梁川星巌（美濃）
            - 福羽美静
            - 鈴木重胤
              - 頼　三樹三郎（京都）
              - 伊藤聴秋
              - 河野鉄兜（林田）
              - 小野湖山（近江）
              - 藤井竹外（高槻）
    - 鈴木貞斎
      - 尾藤二洲（伊予）
      - 西依成斎
        - 春日潜菴〔仲襄〕（京都）
    - 若林強斎（近江）
      - 広木忠信
        - 奥野寧斎 — 川島栗斎
        - 鈴木遺音 — 中沼了三〔葵園〕（隠岐）
          - 西郷従道
          - 桐野利秋
          - 中岡慎太郎
    - 小出侗斎
      - 小野鶴山
        - 中山青莪（秋田）
        - 山口風簡 — 山口菅山
          - 梅田雲浜
          - 有馬新七
        - 箕浦秦川、江南（土佐）
    - 山本復斎
      - 飯田桂山
      - 加藤艮斎
      - 井上升斎 — 田中信謹
    - 大和田玄胤－依胤－祚胤 — 平田篤胤 — 鈴木重胤
    - 中山専庵（秋田）— 中山青莪
  - 谷　垣守
    - 谷　眞潮 — 好井正兄 ----- 谷　干城
    - 鹿持雅澄
    - 坂本直益
  - 桑名黙斎〔松雲〕 — 栗山潜鋒
  - 三宅尚斎（明石）
    - 多田蒙斎
      - 浦上玉堂
    - 蟹　養斎
      - 股野玉川（龍野） — 股野順軒（龍野） — 股野達軒（龍野）
        - 大村黙斎
        - 村田継儒
        - 河合寸翁（姫路）
        - 宇津木綿斎
        - 太田新斎
    - 玉田黙翁
      - 合田麗沢（姫路）
    - 玉田柔庵（志方）
    - 味地修居（美襄）
    - 加賀美梅塢〔光章〕 — 山県大弐（甲斐） — 吉田玄蕃
    - 唐崎定信－清継－信通－赤斎（広島）
    - 井沢潅園（高砂）
    - 石田塞軒
    - 久米訂斎
      - 宇井黙斎 — 千手廉斎 — 千手旭山
        - 月田蒙斎 — 楠本端山※
        - 吉田東篁 — 橋本左内（福井）
      - 塩谷道哲
    - 留守希斎
    - 服部梅圃
      - ※楠本端山 — 楠本晦堂 — 楠本正継 — 岡田武彦 — 牛尾弘孝（九州大学名誉教授）（大分大学名誉教授）
        - 楠本碩水 — 岡　直養
          - ----池上幸二郎
  - 若林強斎 — 西依成斎 ------ 高山彦九郎
  - 松岡仲良
    - 竹内式部 — 岩倉恒視（京都）
  - 谷川士清
    - 唐崎赤斎（広島）
  - 山本主馬（八坂神社）
  - 岡田正利（奈良）— 玉田永教（徳島）
  - 植田艮背〔玄節〕 — 塩谷道碩 — 頼　春水（竹原）
    - 菅野真斎 — 菅野白華
    - 頼　山陽（竹原） — 藤井竹外（高槻）
- （藩主）　保科正之（会津廿三万石）、井上正利（笠間六万石）、加藤泰義（大洲五万石）、小出英安
- （公卿）　正親町公通、正親町実連、正親町公明、正親町実光、土御門泰福、野宮基定、中院通茂
- （その他儒学派）　貝原益軒、永田養庵、藤井懶斎、遊佐木斎、佐久間洞巌（仙台）、田辺希賢、黒岩慈庵、鵜飼錬斎、鵜飼称斎、藤村庸軒、山脇道円、後藤松行、槙　元真
- （その他神道派）　梨木祐之〔桂斎〕、出雲路信直、松本為起、大山葦水、渡辺左京、跡部良顕、福島新之丞、渋川春海、大津重義、松岡恕庵、高田未白、加藤章庵

平成29年（2017年）4月　大分大学牛尾弘孝名誉教授 監修　　本條　衛 記

伊藤太郎平の事跡

伊藤一郎

今年度から山崎郷土研究会の副会長に就任しました伊藤一郎です。長年の議員活動では皆様には大変お世話になりました。その活動に終止符を打ち、郷土の歴史にも目を向けてみたいと思っておりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

江戸時代末期から明治にかけて、この地で果敢に生きた「伊藤太郎平」の事跡を追ってみたいと思います。

伊藤太郎平は、岡山藩士でしたが、故あって脱藩し、鳥取に逃れていました。鳥取から大坂へ向かう途中、山崎にしばらく滞在しました。山田村の橋本旅館に宿泊したと聞いています。旅館の主人から寺子屋をするように勧められ、因幡街道沿いにあった山田村の稲荷神社で寺子屋を始めたとのことです。住居は神社の近くに構えたと聞いています。この稲荷神社は、国道二十九号線開設時に今の山田公民館へ移転しています。稲荷神社の中には、彼の書類が沢山あったとのことです。

太郎平は、明治八年二月七日付で山田村戸長と小学校の掛を飾磨県より任命されています（次ページ写真参照）。明治九年八月二十一日に飾磨県は兵庫県と合併しており、翌十年十二月十八日には兵庫県から山田村・山崎村の戸長と小学校世話掛の任命書を受けています。

また、同十二年九月十五日には兵庫県より中広瀬村も戸長として所管するよう任命されています。

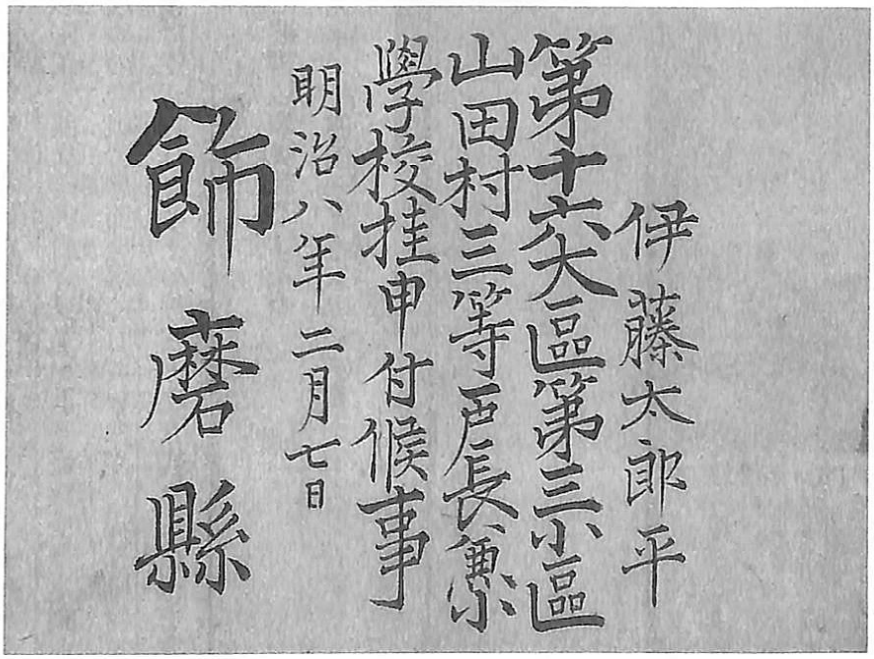
江戸から明治の世になり、寺子屋の合併や小学校の設立が行われました。山崎町山田にあった「伊藤塾」と須賀の学校が合併して徳潤学校と称していましたが、明治十三年に篠陽小学校と合併するとの記事を本会会報四十九号で確認することが出来ました。この篠陽小学校は山崎小学校の前身です。また、明治十六年七月十六日には、兵庫県から播磨国宍粟郡第一番学区学務委員を任命されています。太郎平は幕末から激動の時期を少なくとも二十年ほど子どもたちの教育に傾注したことが想像できます。

太郎平は、宍粟の発展には鉄道の開設が重要と考え、誘致活動を始めます。しかし、当時の宍粟郡は、山崎町に周辺地域の物産品が集約される中心地であったため、物品運搬の荷馬車業が大変発達していました。荷馬車を動かす博労さんは、鉄道が来れば仕事が亡くなると反対運動を行います。太郎平の家は、博労さんに取り囲まれるなど、やむなく鉄道誘致を断念します。

明治は江戸の統治制度を大きく変える激動の時代です。慶応四年（一八六八）一月三日～四日鳥羽伏見の戦いに勝った維新政府は、九月八日には年号を慶応から明治に改元し、明治三年には、大学規則・中小学規則を定めます。その前年には廃藩置県により、山崎藩の藩校思斉館は閉鎖されました。明治五年に政府は、庄屋・名主・年寄等を廃止し、戸長・副戸長に変え、小学校の八・三学制制度を発布し戸長に小学校の整備を求めています。これにより、藩校思斉館は再開され鹿沢の子供たち二十名余が就学し、戸長が教師と成って運営しました。その後、各地区にあった学校が、小規模ではいけ

ないと戸長・教師が協力し明治九年に藩主の旧邸内に校舎を建て、篠陽小学校と名付けて出発しました。山崎町の周囲の学校については、戸長は、神社や寺院や民家を借用して整備しますが、費用は親の負担なので、なかなか生徒が集まりません。また、田植えの忙しい時などは、生徒が来なくなり廃校になった所もあったようです。明治八年には学齢を六歳から十四歳に定め、次の年には、飾磨県公立小学校建築法が布達されるとともに、卒業生に帽子とかんざしを賞与し、就学を奨励しています。この年は、官庁の日曜全休と土曜半休が実施されています。明治十一年には、公立学校の開設認可の権限を地方官に委譲。十三年には、区町村会法の制定。十五年には、篠陽・菅野・知新・揖水・青雲の五学区を合併し、宍粟郡第一学区とし篠陽小学校を本校としました。宇野・高下・上比地・川戸・宇原・野にあった学校を分校とし、塩田・木谷・下比地・下宇原にあった学校を支校としました。十七年には、区戸長・県令の権限強化と戸長の公選制を官選制に変えています。幼児の小学校の入学禁止と幼稚園の設立を奨励した年です。二十一年には、市制町村制交付。二十二年には、大日本帝国憲法公布。二十三年には、郡制交付と小学校令公布。二十五年には、鉄道施設法公布。この年には、財政能力のある市町村は尋常小学校の授業料を徴収しないようにとの通達を出しています。小学校四年が義務化されたとはいえ、就学率は低いものでした。

太郎平の生きた時代の地方自治官は、中央からの指令と地方の実態との狭間で苦悩し裁断したのでしょう。



明治８年　飾磨県が交付した伊藤太郎平の辞令

安積氏とその城跡

竹内克司

安積氏の城跡・居館跡

安積氏の城跡・居館跡館跡は因幡街道と但馬街道の交差する要衝であった宍粟市一宮町安積にある。その位置は引原川と揖保川が合流する揖保川西岸にあり、小さな森となっている場所（字下加門）に、かつては（左図面中央）堀や土塁で囲まれた構（居館跡）があった。

東安積村地番字別図　安積地区蔵

その北西の愛宕山が瑞泉寺城跡である。その山裾には瑞泉寺廃寺跡があり、その場所は居館跡であったと考えられている。さらに北方には岩谷山（七三三m）が聳え、その手前の尾根筋上のピーク（五五五m）は古城山と言われ、尾根筋上に数段の曲輪跡と堀切跡が残る山城跡がある。

安積保を支配した御家人安積氏

安積氏は鎌倉時代、安積保に下司・公文職ならびに三方西郷（宍粟市波賀町）公文職、飾東郡姫道村（姫路城のあるところ）の田畠の知行を任ぜられた御家人であった。

はじめ安積太郎兵衛大尉守氏（出羽守盛氏）は足利尊氏に属し、六波羅攻めの合戦に忠節を尽くしていたが、赤松則村（円心）が播磨国守護に任ぜられるとその被官となり代々安積保を支配していた。

赤松家に被官し最後まで仕える

嘉吉元年（一四四一）主家赤松満祐が第六代将軍足利義教（よしのり）を謀殺するという嘉吉の乱を起こした。その将軍暗殺に手を下した強者が安積監物行秀であった。その乱により赤松家及びその一族は幕府軍の追討により滅亡するも、応仁の乱後に旧領の播磨を奪回し守護家として復活したのに伴い安積氏も復活し、以後置塩城（姫路市夢前町）を本拠とする守護赤松家に最後まで仕えた。

安積氏ゆかりの地全景

宇野氏との対立

戦国末期になると赤松総領家は衰退し、出雲の尼子氏が播磨に侵攻したがそれを食い止めることができなかった。その頃篠ノ丸・長水城主宇野氏は赤松惣領家から離反し、尼子氏とは争わず手を組み勢力の温存・拡大に努めていた。そのため赤松家被官の安積氏と宇野氏はこの頃から対立していたようである。

弘治年間（一五五五～五七）前後に宇野村頼の子政頼が赤松惣領家赤松晴政と戦ったことが最近に明らかにされた。天文一六年（一五四七）（推定）の大井祝陳情案（伊和神社文書）には「安積城退散の時、殿様御帰陣之時、御太刀一腰進上候」とある。これは社家の大井祝が宇野氏の奉行衆に願い出た文書の記述で、安積城退散の時に殿（宇野村頼）が太刀一腰を伊和神社に進上（奉納）している。安積城退散の年月は不明だが安積氏は宇野村頼に城を追われたことがわかる。

天正八年（一五八〇）羽柴秀吉の長水城攻めには、安積氏は田路氏とともに置塩城主赤松則房に従って秀吉軍に属し、天正十年（一五八二）安積将監は宍粟郡河東（一宮町）本知分一〇〇石を安堵された。

安積一族のその後

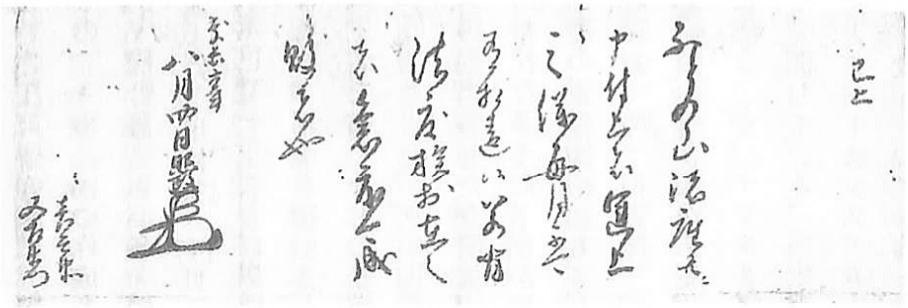
安積家の古文書は地元宍粟市本拠地の安積家の外に三家に残されており、それらの古文書から一族のその後が判ってくる。

その出所は林田藩領の揖東郡吉美町（姫路市大津区）と加西郡西剣坂村（加西市西剣坂町）そして盤城国田村郡三春町（福島県田村郡三春町）である。

地元の安積家は播磨姫路藩の初代藩主池田輝政から富士野鉱山（一宮町）の生産の差配を命じられ、以後安積構村をはじめ郡内の七ケ村の代官となっている。

県外の盤城・福島の「安積文書」安積小太郎氏所蔵から、播磨を離れた一人は後に陸奥・会津藩士になったことが判った。そのことは赤松家最後の当主赤松則房に仕えて阿波・徳島に移り、主家滅亡のあと浪人となり文書を携えて陸奥にわたり会津藩に被官したことを伺わせる。

戦国の世が終わり、安積氏一族は播磨と陸奥でそれぞれの道を歩んでいる。



池田輝政判物

参考…『兵庫県史　史料編中世三』、『播磨国宍粟郡広瀬宇野氏の史料と研究』（宍粟市歴史資料館）、『播磨北部の生業と武士』（兵庫県立歴史博物館）、『角川地名辞典』

山崎の城絵図について

清水　哲

一　きっかけ

四、五年前にたまたま『龍野市史』を読んでいて次のような記述に出会った。

「元禄十年幕府は改めて国絵図の作成を命じた。播磨では姫路・明石・龍野・赤穂の四藩が命じられ、宍粟・佐用・赤穂の三郡は赤穂藩が担当した。十三年には江戸の龍野藩屋敷で清書したが、丹波・摂津との国境問題が起こり…」とのことである。

その頃たまたま『江戸幕府撰国絵図の研究』（川村博忠・一九八四・古今書院）という大部の著書があるのを知りいつかは読もうと思っていた。そして図書館で借りて昨年の年末から年始にかけてやっと読んだ。そのあと同じ川村氏の一般向けの『江戸幕府の日本地図』（二〇一〇・吉川弘文館）、その他関連の書物を読んだ。私の全く知らなかった分野である。以下はそれらの書物からの受け売りである。

二　国絵図（くにえず）

国絵図とは江戸時代に幕府の命令で作成された国単位の行政地図である。北は陸奥・出羽から南は薩摩・大隅までの六八カ国の地図を各地の大名が分担して作った。全国的には、正保元年（一六四四）開始の正保国絵図、その後の修正のため元禄十年（一六九七）開始の元禄国絵図、天保六年（一八三五）開始の天保国絵図と、三回作成されている。慶長十年（一六〇五）に命じられた慶長国絵図は、火災焼失のため写し・控図が十数枚残るだけで、西日本対象かと言われるが詳しいことはわかっていない。この慶長絵図を入れると四回作成されたことになる。

（一）正保国絵図

正保元年十二月、大目付井上政重は諸国大名の江戸留守居に、国絵図・郷帳（郡ごとに村名と石高を書いたもの）・城絵図の作成と提出を命じた。播磨の担当は姫路藩松平忠明・龍野藩京極高和・明石藩大久保忠職・山崎藩松井（松平）康映であった（川村1984：117頁）。

縮尺は六寸一里（約21600分の一）、道は朱色で一里ごとに黒マークを付ける、村名・村石高は小判形の中に書く、郡境を線引きし郡ごとの石高を記載する、城は四角に城名城主名を書くなどの基準があり、これらは以後の国絵図にも継承された。

正保の国絵図原本は明暦の大火で焼失し、再提出させたが明治六年（一八七三）の皇居火災でそれも大半が失われたようだ。しかし写しや控図は各地に残っているとのこと。播磨の正保国絵図も写しや控えがあり、『国絵図の世界』（国絵図研究会・2006・柏書房）に何枚かカラーで載っている。また巻末には各絵図の所在表がある。

最近は大学・自治体の図書館や国立公文書館などが、デジタルアーカイブなどと称して貴重な史資料を画像で公開している。当宍粟に関しても、岡山大学池田家文庫絵図公開データベースシステム→国絵図の3→宍粟山崎の…で見ることができる。

『國絵図の世界』217頁より
新宮八幡神社蔵
「正保播磨国絵図」

（二）元禄国絵図

正保国絵図から五十年たち幕府は国絵図を新たに集めた。この時担当藩に正保国絵図を複写させ、変動した部分を修正させ提出させた（現在各地に残る正保国絵図の多くはこの時の写しとのこと）。幕府はその原案を狩野派の絵師に清書させた。全国で八三枚（大きい国や琉球などは数幅に分割）であった。

幕府は藩同士の国境紛争にも関与して解決させ、さらに国境や海岸線の絵図も提出させたが、これは新たな日本総図作成のためでもあった。播磨は前述のように姫路・明石・龍野・赤穂四藩が担当（絵図元）し、共同分担なので相持ちであった。

ネットで国立公文書館デジタルアーカイブを開き、「元禄播磨国絵図」の高精密画像の目録部分を拡大してみると、赤穂事件の影響なのか提出は元禄十五年と遅れ、提出者は本多中務太輔（姫路）・松平左兵衛佐（明石）・脇坂淡路守（龍野）の三名で浅野内匠頭（赤穂）の名は無く、提出も一番遅かったそうだ。

また、今私の住む「横須村」は篠ノ丸古城の北の麓にあるが、間違って「上寺村」が二つも書かれており残念である。同アーカイブの「天保の国絵図」にはこの間違いは無い。

（三）天保国絵図

天保六年（一八三五）、元禄国絵図事業から一三〇年経ており、幕府は郷帳と国絵図を改訂し石高の増加を把握しようとしたが、生産高の伸びを抑えて報告した藩が多かったので、郷帳や国絵図に示された石高は必ずしも実高を反映していないそうである。各絵図元には参考に元禄国絵図の写しを渡し、変更点を掛け紙（一種の貼り紙）に記して提出させ、それを幕府が絵師に清書させた。天保国絵図は全八三枚が国立公文書館に保管されている。

播磨の天保国絵図は国立公文書館デジタルアーカイブで見ることができる。提出者に名を連ねている明楽飛騨守・田口五郎左衛門・大沢主馬の三名は旗本で、改訂の実質的責任者であった。

余談だが国立公文書館の公開データベース及び『国絵図の世界』の天保安芸国絵図には私の郷里・広島県大崎上島が描かれている。江戸後期におこなわれた干潟の干拓工事以前の状況がうかがえる。伊能忠敬の地図でも同じ場所は見ることができる、

三　城絵図（しろえず）

（一）城絵図とは

正保の国絵図献上の際は、道帳と城絵図の提出が命じられた。その時指示された城絵図の様式は佐賀藩の記録によれば次の様に八カ条の項目であった（川村・1984・121頁）

一、本・二・三丸、間数之事　二、堀の深さ広さの事
三、天守之事　四、惣曲輪、堀之広さ深さ之事
五、城より地形高所あらば、高所と城との間、間数書付可申事
但し惣構より外に高所有之共、書付候事
六、侍町、小路割并間数之事　七、町屋、右同断之事
八、山城、平城書様之事

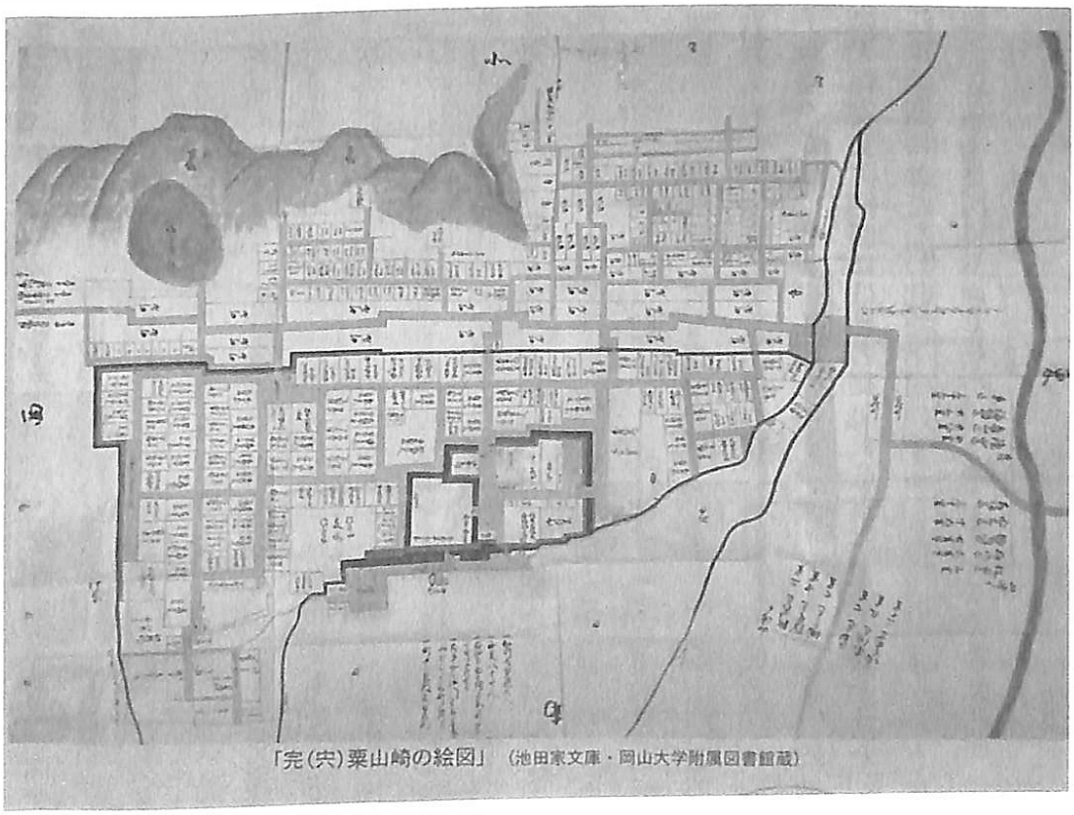
川村氏は正保城絵図の様式の特色として、①城郭と城下の絵図、②鳥瞰図と平面図の混用仕立て、③軍用図、の三つをあげている。

城郭図は大名にとって最高の軍事機密であるが、それを提出させることは、幕府が諸大名を支配下に置いたことを示す。正保元年の七年前・寛永十四年（一六三七）に起きた島原の乱の鎮圧から、一国一城令の確認や各地の城下町の詳細を把握する意図があったのだろう。正保の国絵図・城絵図収集を諸大名に指示したのは、禁教政策も担当し島原の乱鎮圧にも派遣された大目付井上筑後守政重であった。

（二）山崎の図書館2階の歴史郷土館壁にある「宍粟山崎之絵図（複写）、松平周防守時代一六四〇～一六四九」という大きな絵図は、康映が城主の頃の年代からして正保城絵図の控えではないだろうか。

絵図の様式は幕府指示にほぼ近く、また康映は正保国絵図の播磨国担当者の一人でもあった。一六四九年に石見浜田藩に転封となるが、その後池田家の恒元が入封するので、絵図や文書の一部も池田家に引き継がれたのかもしれない。

この周防守（康映）時代の城絵図（複写）は長い展示で色あせたためか、近年新たに「松井（松平）康映が城主の頃（一六四〇～一六四九）の宍粟山崎構之絵図〔画像提供・岡山大学池田家文庫〕」の名で色鮮やかな小さめの城絵図の画像が掲げられている。



康映時代の「宍粟山崎之絵図」
『宍粟立藩四百年』歴史解説パンフレット（宍粟市教委社会教育課作成）の掲載写真より

（三）池田恒元とその後継者時代の城絵図は、ガイドブック『街並探訪』の最新版（二〇一七年版）の見開きに一六七〇年頃の城下として掲載されている。最上山や八幡神社の山に沢山の木々の枝ぶりが描かれているのが特徴だ。山の高さや道の間数など細かい書込があり、本丸には「池田数馬屋鋪」と書かれているので延宝六年頃の絵図であろう。また寺の名前がきちんと書かれているのが康映の頃（正保）の城絵図との違いだ。

この絵図は岡山大学池田家文庫絵図公開データベースシステム→絵図分類→国絵図の3に「完粟山崎構之絵図」（番号T143）の名で紹介されており、拡大することで文字も読み取れる。すこしあとの「宍粟山崎之絵図」（資料番号T1・45・1）なる絵図の高精密画像は非公開になっている。前記の康映時代の城絵図は見当たらない。資料番号T1・45・2は「宍粟山崎之絵図」名だが、画像では宍粟郡全体の絵図である。しかし特記欄に「一　知行取り百四拾六人、一　無足八十七人、…」とあり、これは郷土資料館の周防守（康映）時代城絵図の目録に書かれている文言と同じである。即ち、何かの手違いかまたは他に何かの理由があるのではと考える。尚、数日後には画像を拡大できなくなった。

（四）以後の城絵図

A、鹿沢陣屋跡の紙屋門付近に、享保十年如月とされる「宍澤御陣屋堀之内絵図」が掲げられ説明文がついている。堀の廻りの石垣や塀は鳥瞰図で書かれているが、陣屋は平面図のみである。町屋部分の城下は描かれていない点が正保城絵図と違う。横井先生にお尋ねしたところ、堀口氏が城絵図の写真を入手し描いたのでは。城絵図は武間家の手を離れたとの話も聞いたが詳しくは解らず、原図は確認できない。

B、本多藩記念館所蔵の「山崎藩之図」（天保十二年）は、ガイドブック2017年版6頁の天保山崎藩之図の元になった城絵図である。これも城下町は描かれていない。

C、近隣のたつの市立歴史文化資料館の展示ロビーには、寛政十年の「龍野惣絵図」（複写）が掲げられている。

D、まとめ

川村の著書によれば幕府による城絵図の収集は正保の時だけであった。しかしこれらの例だけでなく、池田家文庫の絵図公開データベースをみれば五百件余りの城絵図が収集されたことがわかる。では正保の地図事業以後の城絵図は何であったのだろうか。

正保城絵図以後も大名の転封は続いたし、城の無許可修築は禁じられたので、城は軍事機密では無くなったはずだ（俚謡で「山崎に過ぎたもの」の一つに埋御門があげられたように）。

吉川弘文館の国史大辞典15巻「城絵図」の項（小和田哲男）によ

れば、城の修築願い出の際の手続き上の付図として描かれ、また兵学教授の教材として城絵図がさかんに編集されたりしたそうだ。

その一例として広島市立図書館浅野文庫所蔵の「諸国古城之図」のなかに「山崎・播磨」の城絵図がある。ネットの小さい画像なので文字が判読しづらいが、寺地の色分けや「伊沢谷口」の地名からみて、池田数馬時代の絵図を写したのではと思う。

余談だが、良い書物や史資料に接したとき、一部をコピーしたり写真に撮ったりしておこう（勿論ものによっては許可を得て）という行為が、思わぬ災害・災難から史資料の継承を守ることになるのだと思う。正保国絵図・オランダ風説書・伊能大図などは原本が江戸城の火災・皇居の火災・関東大震災で焼失したが、写しや控えがあったので後世に残った。

四、おわりに

街歩きガイドをするとき、内堀外堀の跡、敵の攻めを手間取らせるための曲がった道、城に攻め入る敵を埋めて防ぐ埋門、町名や昔のままの町割小路などは、パンフの城絵図とともに説明に役立つ。本来は藩の軍事機密だったはずだが、今は観光資源になるのかと感慨無量である。

幕府は元禄国絵図の時以後は国絵図をまとめて官製の日本総図を作成してきた。やがて幕府の後押しで伊能忠敬の正確な地図が出来た。だが伊能地図は機密事項として社会で使われる事はなかった。それとは別に民間の実用的な日本地図が作られており版を重ねていた。その話までと思ったが、時間も能力も無いし郷土史から離れてしまう。

《追記》

何かの原稿に貴重な資料画像を付けて発表するには所蔵機関の承諾が必要とのご教示を得た。もっともなことである。当会報は販売物ではないし、今までも出典は明示してきたが、締め切り間もない今回は時間が無いので、後日池田家文庫に画像提供をお願いしようと思う。この原稿は国絵図と城絵図の画像がひとつも例示されなかったら意味をなさないので、国絵図は前記『国絵図の世界』から一枚、城絵図は宍粟市教委社会教育課文化財係作成の「宍粟立藩四百年　歴史解説パンフレット」の掲載画像を写した一枚、それに紙屋門近くの説明板に描かれた享保十年の「宍澤御陣屋堀之内絵図」を写した一枚を載せていただくことにした。

参考文献

『江戸幕府撰国絵図の研究』川村博忠　古今書院（一九八四）
『江戸幕府の日本地図』　川村博忠　吉川弘文館（二〇一〇）
『国絵図の世界』国絵図研究会　柏書房（二〇〇五）
『地図から読む江戸時代』上杉和央　ちくま新書（二〇一五）
『山崎町史』、『龍野市史』
諸図書館・国立公文書館などのデジタルアーカイブ。

宍粟の銅鐸出土地の考察

片山昭悟

一、はじめに

平成二十七年五月十五日の早朝に私は宍粟市内の銅鐸がなぜ山中で出土しているのか、この疑問について長年出土地について調査を行ってきた。今回は出土地の考察について紹介する。

宍粟の銅鐸については、1須賀沢銅鐸、2青木銅鐸、3閏賀銅鐸、4千種町岩野辺穴尾銅鐸、5田井遺跡出土銅鐸形土製品です。

二、須賀沢銅鐸の出土地

須賀沢銅鐸は、江戸時代の資料に松平定信『集古十種』と、平田篤胤『弘仁歴運記考』と二つの記録がある。

山崎町須賀沢の山中より寛政二年（一七九〇）に葛ノ庄須賀村の農民が掘り出したもので、松平定信『集古十種』には、山田安貞の所蔵と記載されている。絵図は、鮮明に描かれているが、突線鈕式四区袈裟襷紋の図である。江戸時代の松平定信『集古十種』の原本には、二ページに別れて載っている。当時の銅鐸は、普通六区の袈裟襷紋であり、「弘仁歴運記考」の図は、六区袈裟襷紋の図であり、六区袈裟襷紋が正しくおそらく「弘仁歴運記考」の図のほうがより須賀沢銅鐸であり、同じ銅鐸でありながら異なる貴重な資料である。

江戸時代の絵図に見られる。出土地については、「須賀山中より須賀村の農民が掘り出したもの」とされるのみで、どこで出土したか。いくつか気になる地を書きとどめることにする。

高取山の麓が最も出土地の候補地の一つとされるが定かでない。出土地については、山中とされる所を調査していると、南に神奈備山とされるような山の「大フゴ山」についても、私は重要な山であり、この山とも関連する山中ではないか。北の高取山と大フゴ山は一対のようにもみえる。姫路市安富町へ行く途中に安志峠があり、山崎断層のヨコズレの地でもある、銅鐸の出土地にみられる谷間の山の境ではないとも思われることから須賀沢銅鐸の出土地は、この地点も関連する山中ではないかと考えている。

三、青木銅鐸の出土地

青木銅鐸は、山崎町青木中井小字小谷一〇二〇番地の三の梶間公平氏所有の山林を昭和三十五年（一九六〇）十二月十四日に谷林新氏がぶどう園開墾中に偶然表面直下で埋もれた銅鐸を発見されている。

県道宍粟下徳久線の北約三〇〇メートルの位置で、標高約一四〇メートルの丘陵中腹傾斜面で発見されている。

銅鐸出土地は、昭和五十二年三月二十九日に兵庫県の文化財に指定されている。現地には案内板が建ててある。

現状は、青木字小谷の尾根の南東に面する谷間の東南向き丘陵斜面で、これまで何度も足を運んで現地は確認している。山崎の市街地（イオン山崎店の屋上）よりみると、遠くに切窓峠が見える銅鐸の出土地にみられる谷間の山の境ではないかとも思われる。青木銅鐸は、高さ三十・七センチの外縁付鈕2式四区袈裟襷文銅鐸で、二

面の文様が異なる銅鐸である。このタイプの銅鐸には動物の紋様は描かれているのがみえるが、青木銅鐸は今のところ見当たらない。

青木銅鐸の出土地は、山崎断層の特徴のヨコズレが顕著にみられ、切窓峠の右に連なるばひろ山と寺尾山の山並の麓で、丘陵地の青木の字小谷という青木の集落がみえる小さな谷間の北斜面のぶどう園の開墾中に、石を伴って出土している。

私は青木の戸倉山の西に連なる富士のような山も青木銅鐸に関連する神の宿る山ではないかと考えている。このことから青木が銅鐸を埋納するのにふさわしい地であったもの考えている。

四、閏賀銅鐸の出土地

閏賀銅鐸については、明治四十一年（一九〇八）四月三十日に一宮町閏賀字西山五九七番八より出土しているもので、今は（公財）辰馬考古資料館に保管されている。私は展示されているときに、高井悌三郎館長より現物を手に取って観覧させていただいたことがある。この銅鐸の出土状況は、辰馬悦蔵氏、太田陸郎氏はじめ多くの文献に紹介されているもので、発見されたのは、鵜野伝四郎さんで、西山の五合目付近に杉の木の苗を植えられているときに、トンガで銅鐸の裾野付近を叩かれたようで「カチッ」と鈍い音がしたとの言い伝えがある。閏賀字西山の北西斜面で、遠景は、小さな丸い山の中腹で、背面には高畑山が見える。伊和三山の一つで磐座がある。センターいちのみやより銅鐸が発見された地を見ると高畑山と、その北の峰の中に神の宿る山のような形をした山があり、西山はこの麓にあり、重要な山である。このことから閏賀銅鐸は、この地が銅鐸を埋納する地にふさわしいのであったものと考えられる。どこで祭りに使用して廃棄することになったか、やはり、揖保川の東の伊和遺跡であると推定するのが穏当ではないか。平成二十七年六月十五日の午後一時頃に一宮町閏賀の宍粟市社会福祉協議会から現地の写真撮影と出土地の現地調査をおこなった。

五、千種町岩野辺穴尾銅鐸の出土地

千種町岩野辺穴尾銅鐸は、突線鈕式の鈕の部分で、近畿式の銅鐸で、見る銅鐸である。弥生時代後期の銅鐸。千種町岩野辺の穴尾という山中の田のところから昭和五十五年（一九八〇）三月に出土した。ほ場整備で出土地の調査を平成二年（一九九〇）七月から八月にかけて行ったが、銅鐸は廃棄されたもので、付近より流出したものと考えられる。この銅鐸片も山中であり、宍粟の銅鐸を考える上で重要な地である。

六、田井遺跡出土銅鐸形土製品の出土地

田井遺跡出土の銅鐸形土製品は、山崎町田井のほ場整備に伴う埋蔵文化財確認調査で、昭和六十三年（一九八八）十月十九日出土している。高さ十・七センチの綾杉紋様の土の銅鐸である。

銅鐸形土製品は、私的な祭祀に使用されたものと思われる。集落のものとされる。出土遺物は畿内Ⅲ様式の壺口縁が上層から出土している。山崎町田井は、山崎からみて谷間のところであり、青木や須賀沢と比較的に類似した地形をしている。

七、須賀沢銅鐸の出土地再考

須賀沢銅鐸は山中より出土したとされるが、須賀村のどこから出土したかは不明である。宍粟の銅鐸出土地を考察していると銅鐸のほとんどが山の谷間で出土している。

島根県より加茂岩倉銅鐸の関連で来られて出土地の調査をしていた時に、農協の屋上からみて高取山から派生した谷間の可能性が高いとのことであった。その後調査していると、高取山と大フゴ山が神の宿る山の神奈備山のような地形をしていることに気が付いた。

八、青木銅鐸の出土地再考

青木銅鐸は、ぶどう園の開墾の作業中に出土している。山の麓にあたるところで、小高い山の谷間のところから出土している。

銅鐸の出土地には扁平な石があったという。塩田へ行く途中の青木字小谷である。国土地理院の「土万　２５０００分１」を見ると、山崎断層のところで、かつての地震によるヨコずれした痕跡がみられる。

山崎から見ると、切窓峠の手前で右へ至る地点で、菅野地区の青木の西山の左右の山には神の宿る山に見られる特徴的な山のようにも見える。

城下地区の野の塚の元から西北の方向を見ると、戸倉山の西に位置する富士山のように見える。菅野の青木の山は不思議な山がある。青木から東をみると、大フゴ山がみられることから地形的にみて銅鐸を所持したのは、鹿沢の台地上に弥生時代の集落が存在していたものと考えられる。

九、まとめ

銅鐸は弥生時代に出土したもので、弥生文化を考えるうえで重要な資料である。今回宍粟の銅鐸についてどこで出土したかを考察している。いずれも出土地は山の境のあるところではないかと拙い文を紹介させていただいた。

今後宍粟の銅鐸出土地について調査と研究で解明できるものと考えられる。

参考文献

①須賀沢銅鐸と青木銅鐸については、
拙稿「山崎町出土の二つの銅鐸」『山崎郷土会報九八号』
平成十三年九月
②閏賀銅鐸と岩野辺穴尾銅鐸については
拙稿「宍粟郡出土の二つの銅鐸」『山崎郷土会報一〇〇号』
平成十四年九月
③田井遺跡出土銅鐸形土製品については、
拙稿「田井遺跡の銅鐸形土製品について」
『山崎郷土会報九九号』平成十四年四月
④須賀沢銅鐸図ついては、
拙稿「宍粟市山崎町出土の須賀沢銅鐸図について」
『山崎郷土会報一一六号』平成二十三年二月

地区の話題

① ふるさと戸原の地域づくり活動

～みんなでふれあう戸原のお宝探し～

戸原郷土史学習同好会　会長　釜　井　宣　雄

少子高齢化、核家族化が進み、住民の連帯意識の希薄化が進んでいます。それを改善するため、本来の地区の姿と魅力と戸原のお宝を発見し、自然や歴史文化を大切にして将来に語り継ぐとともに、地域のコミュニティの活性化と生きがいのある地域づくりを行う新しい村づくりに挑戦する良き機会として、平成二十二年一月に地区内十六団体により「ふるさと戸原地域づくり委員会」を結成しました。

平成二十三年三月に「ふるさと戸原」を六百部発刊しました。これは、戸原郷土史学習同好会のメンバーと編集委員により、写真、文章の構成等、総て手作りで作成したもので、名所・旧跡など四十八ヵ所を掲載し、ふるさとを改めて知る良い機会となりました。

また、平成二十三年から二十六年に地域の遺跡の看板を設置し、平成二十四年にガイドブックとして「ふれあい探訪」を千二百部作成しました。また、平成二十四年度より「見てみよう巡って学ぼう戸原の史跡」とかかげて三世代交流ふれあいウオーキングを毎年実施し、今年で六回目となっています。

このウオーキングは、毎年五月下旬に、本委員会と戸原小学校の主催により開催しています。案内役は、戸原郷土史学習同好会の会員です。

戸原地域を三コースに分かれ、毎回二百名余りの参加者のもと、子どもや高齢者らが地域の歴史について学ぶとともに、住民同士の親交や交流を深め、日曜日の半日のひとときのふるさと巡りを満喫しています。

また、子ども達が地域の魅力を再発見し、神社・仏閣、史跡や遺跡等、地域の宝を大切にするとともに、将来に語り継ぎ、自分たちの生まれ育った「ふるさと戸原」を守ってくれることを期待して、毎年秋に戸原郷土史学習同好会会員の案内により、戸原小学校四年生を対象に、「ふれあい探訪」を実施しています。

このように年二回の「三世代交流ふれあいウオーキング」、「ふれあい探訪」は、参加者が普段聞く機会が少ない地元に伝わる逸話などに耳を傾け、地域の魅力を再発見しています。

これからも出来る限り続けていきたいと思います。

ふるさと戸原の地域づくり活動写真

山崎藩御蔵屋敷

戸原村忠霊塔

建速神社

弁円の墓

出発式全体写真

西願寺

地区の話題

② 城下小学校の時鐘

チャイムとして使われた鐘を児童が鳴らしました

神戸新聞　平成二十九年三月十四日付記事

宍粟・城下小

大正期、地元の女医が寄贈
半世紀ぶり鐘の響き

宍粟市山崎町御名、城下小学校の児童が13日、大正時代から戦後にかけてチャイムとして使われた鐘を約半世紀ぶりに鳴らした。カーンカーンと体育館に鳴り響く甲高い音に、児童らはかつての授業風景を想像した。

鐘は高さ42センチ、重さ13・5キロで、側面に「寄付者　井上かめ殿　大正十二（1923）年一月」と刻まれている。井上かめは校区の千本屋地区にいた女医だという。

当時、鐘は学校玄関横につり下げられ、校務員が鳴らして授業の開始と終わりを告げた。60年ごろまで使われたが、その後は倉庫や校長室で保管されていたという。

この日の全校朝会で鐘を鳴らした6年生の栗山浩輝君(12)は「高くてきれいな音だけど、思ったより小さい。授業中にしっかり聞こえたかな」と話していた。

（古根川淳也）

約半世紀ぶりに鳴らされた城下小学校の鐘＝宍粟市山崎町御名

地区の話題

③ 塩田の明證寺の梵鐘

谷間に響く鐘の音

神戸新聞　平成二十九年二月一日付記事

明證寺釣り鐘新調

趣ある音 谷あいに響く

山崎・塩田

戦国武将・黒田官兵衛が仕えた小寺氏にゆかりがある宍粟市山崎町塩田、明證寺の釣り鐘がこのほど、新調された。趣のある音色が谷あいの集落に響き渡り、住民らにも評判がいいという。

同寺は1543年の創建で、合戦で討ち死にした小寺氏の一族を弔う菩提寺とされる。古い釣り鐘は戦時中に供出され、1952年に鋳造されたものが使われていたが、10年ほど前に割れて音が響かなくなっていた。

新しい釣り鐘は京都市のメーカーが製作。直径72センチ、重さが450キロあり、雲の上を舞う天女などの模様が鋳造されている。昨年12月の大みそかに、除夜の鐘として住民らが突き初めをした。

毎日正午と午後5時に鐘を突く中川恵純住職(66)は「響きや余韻がきれいと評判で、門徒も満足してくれている。この先も、末永くいい音を響かせてほしい」と話していた。

（古根川淳也）

新調された明證寺の釣り鐘＝宍粟市山崎町塩田

なお、「地区の話題」の神戸新聞の掲載記事については、神戸新聞社デジタル事業局メディアプロモート室データベース担当様より七月二十八日付で転載使用の許諾をいただきました。

地区の話題 ④ 金谷山部古墳

金谷山部古墳は、兵庫県指定文化財（史跡）です。

この古墳は、国見山の尾根先端部に位置しています。金谷字亀ヶ尾に築かれています。

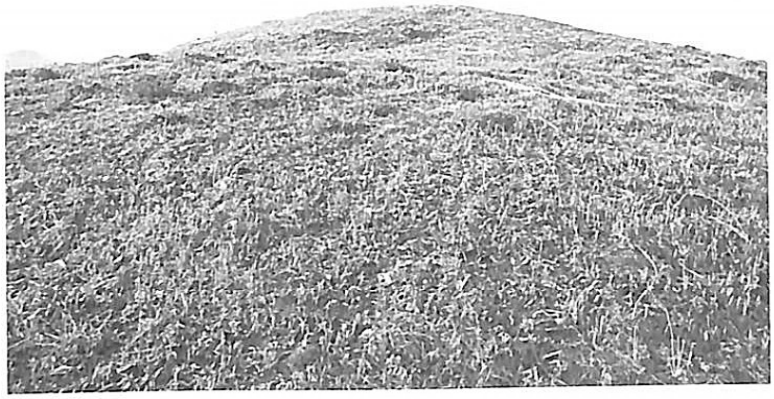
今から一五〇〇年ほど前の古墳時代中期の円墳です。

古墳の形は、南北の楕円形をしています。長い径は、二十メートル、短い径は、十四メートル、高さが一・五メートルの規模です。

昭和五十一年に発見されました。

『播磨国風土記』比治里の里長である山部比治から金谷山部古墳となづけられました。

ふもとに大きな案内板があります。山崎の遠くからも金谷山部古墳がよくわかります。宍粟市の古墳時代を考える上で貴重な資料です。



金谷山部古墳

地区の話題 ⑤ 金谷一号墳

金谷の湯船口にあります。直径が七～八メートル、高さ二メートルの小さな古墳です。横穴式石室で、大正六年（一九一七）に須恵器（長頸壺）、金環、銀環、銅鏡が出土しました。大正八年（一九一九）に東京国立博物館に寄贈されました。

銅鏡は、瑞雲双鸞八花鏡（ずいうんそうらんはっかきょう）という奈良時代の鏡です。

神戸新聞　平成3年(1991年)2月23日　土曜日

金谷1号墳の唐式鏡

長屋王邸跡出土品と共通

山部氏の実像へ手掛かり

形、文様ほぼ同一

朝廷と太いパイプも

神戸新聞　平成３年２月２３日付

会員・家族の文芸

◎冠　句

背を見る　鹿島サッカーレアル追う　大谷　志路
背を見る　タクト持つ手に響き会う　嶋津　千里
背を見る　早く追い越せ親の影　坂本　忠彦
背を見る　子等の素行が我に似る　実友　勉
背を見る　母鹿追って跳ねる脚　谷笹　まや
背を見る　親の道標辿ります　高井　怜依
背を見る　旅立ちの時手を振って　三木ひづる
背を見る　父と歩いた山の道　中瀬　公三
元気出す　陽の恵み受け野の草木　大谷　志路
元気出す　今度こそわと友の声　嶋津　千里
元気出す　知恵と工夫の高齢者　坂本　忠彦
元気出す　周りの人の支えこそ　実友　勉
元気出す　鏡に向かって頬上げる　谷笹　まや
元気出す　歌を唄えば足軽く　高井　怜依
元気出す　家族の愛に支えられ　三木ひづる
元気出す　年齢を忘れて人の中　中瀬　公三

◎俳　句

難解の闇斎涼し紺作務衣　京屋　伊助
闇斎記ゆきもどりしつ日の永き　京屋　伊助
十薬の移り香強き野良着ぬぐ　杉山美保子
桜咲き至福の時を分かち合ふ　杉山美保子
夏草や出棺前の黒き蝶　高井　麗子
どくだみ茶煎りたる香り隣家まで　高井　麗子
忌を修し芽吹く参道老姉妹　田中　良子
梅雨しとど置き薬屋の長居かな　田中　良子
一村をはしるドミノの青田風　田中　慶英
緑風を聴きつつ僧の法話かな　田中　慶英
明け暮れる村の生活や合歓大樹　鳥羽チエノ
水煙あげる揖保川梅雨深む　鳥羽チエノ
繙きし古書の書き込み十三夜　三浦　ゆき
虫浄土野の精霊の安らげり　三浦　ゆき
大潮の浜に波跡浅蜊掘る　里見　和樽
桜蘂降りて寝釈迦の衣染め　里見　和樽
騎馬像の青葉城址や風薫る　髙井　智代
変り無き日々彩りて春の山　髙井　智代
枕辺の句帳開けば夏の月　速水美知代
少子化の土俵の嬰児泣き相撲　速水美知代
秋陰の濃きも薄きも札所寺　宗平　圭司
拭く汗が生者の証退院す　宗平　圭司
廃園の子等の恋しと花吹雪　矢野登次郎
廃園や人影絶えて桜舞う　矢野登次郎

※次号に掲載する文芸作品の投稿をお待ちしています
あわせて新会員を募集しています

深川　定義氏を悼む

蔦沢地区　宗　平　圭　司

深川氏は、昭和五年三月二十七日に生を受けられ、生涯農業一筋に山崎町片山で生活し篤農家として広く知られた方でした。

また、片山自治会の会長他要職を永年勤められました。

一方では、郷土の歴史研究家としても知る人が多く、特に長水城・宇野一族に詳しく、本会報にも度々投稿していただきました。

晩年は山崎町東下野の養護老人ホームに入居されておりましたところ、老衰により、平成二十九年五月九日逝去されました。

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

宍粟市全般に渡り、数多くの史実の研究家として、貴重なお方を失い残念です。改めて深川定義氏に感謝し、厚くお礼申し上げます。

なお、本会報に出稿された内容を題名だけの紹介になりますが、ここに掲載します。

第一一二号	長水城雑記	平成二〇・九
第一一三号	奥井記念碑について	二一・四
第一一四号	当地方における異常気象	二一・九
第一一五号	新篠の丸軍記（一）	二二・六
第一一六号	新篠の丸私記（二）	二三・二
第一一八号	新篠の丸私記（三）	二四・三
第一二一号	新篠の丸私記（四）	二五・八
第一二四号	法蓮寺縁起	二七・三
第一二五号	地名の「読み方」の特異性について	二七・八

二十九年度の研修旅行のご案内

研修部

日　　時　九月二十四日（日）　午前八時集合出発
　　午後六時三十分頃帰着（予定）

集合場所　宍粟市市役所玄関

行　　先　岡山県高梁市
　　天空の山城、備中松山城と吹屋、ベンガラの町並散策

参加費　一人　金　五、五〇〇円（昼食・入場料を含みます）

申込方法　九月一日（金）より二十日（水）まで
　　神姫バス山崎待合所北の
　　神姫観光山崎案内所へお願いします。

時間は、午前十時から午後三時まで。土・日曜祝日は休みです。会員の家族の参加も下さい。

今回は山崎文化協会と合同で実施します。

詳細は、八月発行の会報第一二九号に挿入のパンフレットをご覧ください。

備中松山城へは駐車場からふいご峠（八合目）までは、シャトルバスで行きます。それから徒歩約二〇分です。

なお、定員になり次第締め切ります。

事務局だより

平成二十九年度の通常総会が開催されました。

記

日　時　平成二十九年四月九日（日）午後二時より

場　所　宍粟防災センター四階研修室

議　事　一、平成二十八年度事業報告について

二、平成二十八年度会計報告について

平成二十八年度監査報告

三、役員改選について

四、平成二十九年度事業計画について

五、平成二十九年度会計予算について

以上の各議案は承認されました。

総会終了後、記念講座として、記録映画（16ミリ）「昭和五十四年のさつきまつり」を鑑賞しました。

編集後記

『山崎郷土会報　第一二九号』をお届けします。

第一二九号は、大谷司郎会長の明治以降の年表（二）、鎌田裕明さんの「崎門学派の系譜」と「福原謙七翁碑」のパネルについて、伊藤一郎さんの伊藤太郎平の事跡、竹内克司さんの安積氏とその城跡、清水哲さんの山崎の城絵図についてなど皆様のご協力により充実した号になりました。

今回の特集は、地区の話題をテーマにしました。

戸原の地域づくり活動は、子どもや高齢者が地域の歴史について学んでおられ、三世代交流ふれあいウォーキングを六回も実施されていることです。

「子どもたちが地域の魅力を再発見し、神社・仏閣、史跡や遺跡など地域の宝を大切にし、将来に語り継ぎ自分たちの生まれ育った、「ふるさと戸原」を守ってくれることを期待したい」と書いておられたのが一番印象に残った言葉です。

それから城下小学校に小さな鐘が残っていたことから、子どもたちが鐘を鳴らしてくれました。明證寺の鐘は、谷間によく響きます。金谷山部古墳は、晴れた日には、城下や山崎の遠くからでもよく見えます。

山崎には地域の宝がまだまだあります。それを伝える役割が、山崎郷土研究会であり、山崎郷土会報であると思います。

地域で取り組んでおられることや地域に伝わる伝承について原稿を募集しますのでよろしくお願いします。

なお、本文中の原稿については、原文を尊重して編集しています。

（片山昭悟）

平成二十九年度・平成三十年度役員名簿

役職名	氏名	住所	電話
会長	大谷　司郎		
副会長	伊藤　一郎		
事務局長	田中　健三		
会報部長	片山　昭悟		
研修部長	坂本　忠彦		
史跡部長	伊野　操治		
山崎地区西1支部長	竹内　克司		
山崎地区西2支部長	高井　淳		
山崎地区東支部長	伊藤　一郎		
山崎地区北支部長	伊野　操治		
城下地区支部長	片山　昭悟		
戸原地区支部長	田中　健三		
河東地区支部長	宇野　正憲		
神野地区支部長	上田　泰三		
蔦沢地区支部長	宗平　圭司		
菅野地区支部長	浅田　茂樹		
土万地区支部長	森田　且元		
監事	浅田　茂樹		
監事	三宅　保雄		

平成二十九・三十年度　各部構成			
会報部長	片山　昭悟		
会報部員	河本　雅視		
会報部員	浅田　耕三		
会報部員	鎌田　裕明		
会報部員	竹内　克司		
研修部長	坂本　忠彦		
研修部員	宗平　圭司		
研修部員	石野　和雄		
史跡部長	伊野　操治		

PHOTO-STUDIO
Ueyama
P.C.S
スタジオウエヤマ
●山崎店　兵庫県宍粟市山崎町山田204
TEL(0790)62-8027
FAX(0790)62-8827

株式会社 安井書店
ブックランド店
山崎町中井
TEL(64)2051・FAX(64)2052
本店(文具部)
山崎町中井
TEL(62)0700・FAX(62)2117
http://www.yasuisyoten.co.jp/

パンフレット・デザイン広告
名刺・封筒・伝票・新聞広報誌
ポスター・案内状・シール等
(有)稲田印刷
〒671−2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL(0790)62−0254 FAX(0790)62−4764

まごころを伝えます。
一献献上　品質本位
播州一献
地酒
山陽盃
酒造
確かな品質と味わい。
SANYOHAI
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎28
TEL.0790(62)1010　FAX0790(62)6218
E-mail info@sanyouhai.com HP http://www.sanyouhai.com

いとう画廊
兵庫県宍粟市山崎町山崎413
TEL(0790)62−0371
FAX(0790)62−0371

創業明治28年・さつき本舗
四季の菓子
御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を
御菓子司 あらき
本　店：播州山崎町山田 (電)62−0160

外科・内科
山中医院
院長　山中潤一
山崎町西町・TEL(62)0036

ほっと、ひといき
伊沢の里
●各種宴会　祝い、法要、同窓会(送迎バス有り)
●宿泊　観光、ビジネス　帰省
●日帰り入浴　生薬風呂、露天風呂、サウナ
●レストラン　御膳、定食、麺類、丼物
兵庫県宍粟市山崎町生谷214−1
TEL.0790-63-1380 FAX.0790-63-0362
URL:www.isawanosato.com E-mail:info@isawanosato.com